

「葛飾柴又の文化的景観」ニュース

水害(災害)の記憶と柴又

東京低地の中の微高地を中心に歴史を重ね、発展してきた葛飾柴又。昭和22年(1947)のカスリーン台風をはじめとする水害や遠く離れた地で起こった災害とも関わってきた地域でもあります。

今回は、柴又と水との繋がりを考える上で欠かすことのできない「水害(災害)の記憶と柴又」をテーマに、帝釈天題経寺で行われる「施餓鬼会(川施餓鬼)」と柴又八幡神社の例大祭で奉納される「神獅子」の2つの伝統行事をご紹介します。

□ 帝釈天題経寺で施餓鬼会が行われました(8月17日)

餓鬼(がき)とは、生前の悪行によって餓鬼道(死後の転生する6つの世界の一つ)に落ちた魂や俗世で供養してもらえず無縁仏となってしまった霊が鬼となってしまったものです。飲食をすることができず、飢えと渇きにもがき苦しんでいる餓鬼に食物や飲み物をお供えして供養するのが施餓鬼会(せがきえ)です。お盆に行われることが多く、亡くなった祖先や家族の供養を行うのと同時に、餓鬼の供養も行うことで徳を積み、自身にも救いがあるとされています。

今年の施餓鬼会は、午後2時、鳳翔会館でのご住職の法話に始まり、祖師堂(本堂)に移動して法要が行われ、読経と太鼓の大きな音が堂内に響き渡りました。例年であれば、この後、江戸川に移動して読経と灯籠流しが行われるのですが、今年は台風の影響で江戸川には行かず、遼溪園(すいけいえん)(東京都指定名勝)の池のほとりで灯籠を並べ、読経が行われました。静寂に包まれた遼溪園が、災害や水難事故の犠牲者を弔う、厳かな雰囲気になりました。



遼溪園で執り行われた施餓鬼会

□ 柴又の施餓鬼会(川施餓鬼)

天明3年(1783)7月8日の午前10時、大きな爆発音とともに浅間山の大噴火が起こりました。火口からの大量の噴出物は、北麓へと流下し、火砕流となって15km離れた吾妻郡鎌原村(現在の群馬県嬬恋村)を飲み込み、利根川支流の吾妻川へと流れ込み泥流となりました。泥流は吾妻川のみならず利根川流域の村々に被害を与え、この火砕流と泥流による死者は1,500人に上ると言われています。そして、泥流によって犠牲となった方々や家畜が利根川から江戸川へと流下し、浅間山から200km離れた武蔵国葛飾郡柴又村の川べりまで流れ着きました。柴又の人々は、流れ着いた犠牲者を手厚く供養し、帝釈天題経寺第9世住職の日敬上人の発起により、噴火から何と10日後に供養碑を建立しました。「浅間山噴火川流溺死者供養碑」(※題経寺墓苑に所在。昭和52年(1977)に葛飾区有形文化財に指定)には、「老若男女」「魚畜」と刻まれ、生けるもの全ての犠牲者を弔う思いが刻まれています。柴又で施餓鬼会が行われるようになったのは、この「浅間焼け」と呼ばれる浅間山大噴火がきっかけになったと伝わり、240年経った今もなお、その思いは継承されているのです。また、題経寺の境内には、平成23年(2011)3月11日に発生した東日本大震災の犠牲者を供養する「東日本大震災犠牲者供養塔」も建てられています。題経寺は東日本大震災以後、この施餓鬼会の日を特別な日として強く意識し、自然災害や水難事故による全ての犠牲者への慰霊の気持ちを込めて執り行っているそうです。施餓鬼会の行事や題経寺の境内などに佇む慰霊碑は、災害の犠牲となった方々の供養と共に、過去の災害の記憶を今を生きる私たちに伝え、そして、未来へと継承していく役割も担っているのです。



江戸川の川面に浮かぶ灯籠

□ 柴又の伝統行事を伝えていく 杉浦 健 氏

(帝釈天題経寺檀家総代、葛飾柴又の文化的景観保存・活用推進委員会委員)

平成9年から父親と代替わりをして、正式に檀家総代として責任者をやらせて頂いています。両親が題経寺の手伝い等をしていたので、子どもの頃から様々な行事に顔を出し、見聞きしていましたが、それが施餓鬼会だという認識は当時はなかったですね。代替わりをしてからは施餓鬼会には毎年参加をして、檀信徒の方々と顔を合わせながら色々なお話をしています。

施餓鬼会の日、題経寺で法話と読経が行われた後、御前様を先頭に、団扇太鼓(うちわだいこ)を叩きながら「南無妙法蓮華經」を唱え、矢切の渡ししのそばに設けられた祭壇へと向かいます。祭壇にろうそくを立ててお経を上げ、災害による溺死者などを慰霊します。今年は台風の影響で残念ながら江戸川河畔での法要は中止となりましたが、天気が良ければ渡し船を2艘お借りして、檀信徒さんからお預かりした流し灯籠と流し塔婆を船の上からそっと流して供養を行います。施餓鬼会は、それほど派手な行事ではないので、外から見に来られる方は多くはありませんが、河川敷はフリーな場所なので、「何だろう」という感じで見に来られる方はいらっしゃいます。行列を成してお経を唱えている姿が珍しいからだと思います。最近は新型コロナの影響で行事が制限されたこともあり、仕方のないことではありますが、行事の参加者は以前に比べて少し減っているかなという印象はあります。題経寺としても、新型コロナには引き続き気を付けながら、また以前のように様々な行事が行われるようになっていくのだと思います。今後も、新しくお寺と関わりを持たれる方に、柴又に伝わる伝統的な行事をご説明し、ご紹介していきたいと思っています。



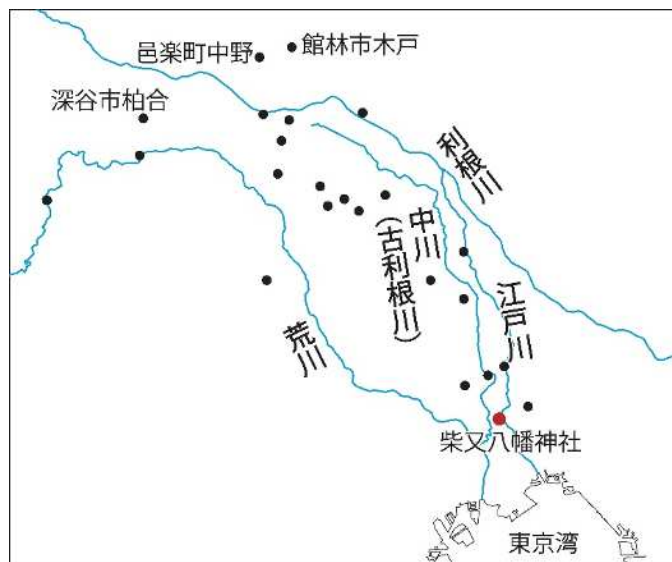
杉浦 氏

◆ 柴又八幡神社の神獅子

柴又の鎮守(ちんじゅ)八幡神社の例大祭では、神獅子と呼ばれる獅子舞が奉納されます。お正月等によく見られる獅子とは異なり、鳥の羽のような装飾が施されているのが特徴です。この神獅子は、三匹の獅子で構成される「三匹獅子」と呼ばれる獅子舞で、三匹の獅子は雄獅子・雌獅子・小獅子と呼ばれているそうです。昭和53年(1978)に葛飾区無形民俗文化財に指定されています。



いわゆる「三匹獅子」の獅子舞は、荒川・古利根川(ふるとねがわ)流域に多く分布し、柴又八幡神社の神獅子もその系譜に属するものと見られます。荒川・古利根川流域は洪水の多発地帯で、いにしえから水害に見舞われ、三匹獅子には、こうした水害から人々を守るという願いが込められていると言われています。三匹獅子に水害除けの願いを込めたのは、当時の人々が獅子を龍になぞらえていたためと考えられます。龍は、河川・湖・井戸等に宿る水神の使いとされ、水害除けや雨乞いの際に崇拝されていました。そのため、水神に見立てた三匹獅子を舞うことが水神を崇拝することに繋がり、その加護により水害から守られるとされたのだと考えられます。



荒川・利根川流域で獅子頭の漂着伝説が残る場所

この三匹獅子の神事は、上流域と下流域との交流の中で伝播していったと考えられ、上流域の群馬県や埼玉県、三匹獅子と下流域の柴又の神獅子とを比較すると共通点とともに相違点も見られます。共通点は獅子頭が漂着したという伝承です。例えば、群馬県館林市木戸では、大水で木戸村付近に流れ着いた獅子頭を村の住職が拾い上げたと言われています。この獅子頭は、上流の群馬県邑楽町中野から流れてきたと言われ、中野側にも雨乞いを神社で行っていたところ、獅子頭が流出して木戸の寺に流れ着いたとの伝承も残っています。また埼玉県深谷市柏合には、上流の

(右面に続く→)

榛名山から流れてきた木で獅子頭を作ったという伝承があります。榛名山は雨乞いの山として信仰されており、榛名山からの流木で獅子頭を作ることで、雨乞いの霊験を期待したと考えられます。また、「辻切(つじきり)」と呼ばれる神事もそのひとつと考えられます。辻切とは村の境界の辻で獅子を舞い、疫病などの邪気(じゃき)が村に入らないようにするものです。柴又では、疫病などの流行り病が発生した時期などに辻切を行い、疫病退散を祈願していました。埼玉県越谷市下間久里や春日部市西金野井の獅子舞などでは今でも辻切が行われています。



境内で奉納される神獅子舞（昭和30年代撮影・個人所蔵）

一方、相違点として三匹獅子の名称の違いがあります。柴又では神獅子と呼ばれていますが、群馬県や埼玉県の利根川流域ではササラという竹製の楽器を舞に用いることから、「ササラ」「ササラ獅子舞」と呼ばれています。柴又の神獅子ではササラを用いないためこうした名称の違いが生じたとも考えられます。また、三匹獅子を構成する獅子の呼称も「前(先)獅子・後獅子・中獅子」(群馬県)、「大(男)獅子・中獅子・女獅子」(埼玉県中部以東の地域)、「法眼・後獅子・中獅子」(群馬県に近い埼玉県北部の児玉地域)等があり、伊勢崎市・高崎市・太田市・大泉町等の一部の地域では大獅子のことを「法眼(ほうがん)(宝冠・判官)」と呼ぶそうです。

柴又の神獅子は、上流域の三匹獅子と同様に漂着をその由来としますが、他の地域にはない柴又ならではのエピソードが伝わっています。昔、柴又の三つの獅子頭は柴又村の名主の家の蔵に保管されていましたが、蔵の米が減ったことを獅子頭の仕業だと考えた名主が怒って獅子頭を江戸川に流してしまいます。しかし、獅子頭は何度流しても元の場所に戻ってきたのだそうです。それを見た村人が驚き、獅子頭には不思議な力があるのだと思い、八幡神社に奉納したと言われています。こうした伝承からも三匹獅子と水(川)との関わり、そして、柴又の人々の水(川)への思いをうかがい知ることができます。柴又の人々は、水害や疫病といった悪しきものから柴又の人々を守るための神事として神獅子舞を大切に継承し、毎年、柴又八幡神社に奉納してきたのです。

新・寅さんまつり～寅さんの夕べ～が開催されました！

8月26日(土)・27日(日)の2日間、帝釈天題経寺と参道を会場に「新・寅さんまつり」が開催されました。柴又小学校と東柴又小学校の生徒さんによる鼓笛隊が参道を行進し、境内でも演奏・演技が披露されました。周囲が暗くなった19時には境内の諸堂や瑞龍の松・参道がライトアップされ、竹の行燈が石畳を彩りました。そして、ライトアップされた開山堂の前で弦楽器の演奏会が行われました。

題経寺と参道は、「葛飾柴又の文化的景観」の重要な構成要素であり、柴又を象徴する場所でもあります。こうしたその土地ならではの歴史的な建造物や公共空間を利用して行われるイベントのことをユニークベニューと呼びます。題経寺諸堂のライトアップ、境内で



境内のライトアップ



弦楽器の演奏会

行われた鼓笛隊や弦楽器の演奏は、「葛飾柴又の文化的景観」を活用したユニークベニューであり、柴又ならではの演出でした。暗闇に白く照らし出された諸堂の荘厳な彫刻美、緑のライトに照らされ青々と茂って見える瑞龍の松、バイオリンやピオウなどの美しい音色が醸し出す雰囲気は、まさに非日常の特別な時間でした。



参道のライトアップ

特別公開「山本亭防空壕見学」を開催しました

8月19日(土)、普段は公開されていない山本亭防空壕の見学イベントを区生涯学習課主催で開催しました。猛暑の中での開催でしたが、葛飾区内外からたくさんの方々にご参加いただきました。

「葛飾柴又の文化的景観」の重要な構成要素の一つである山本亭は、かつて瓦工場を営んでいた鈴木安五郎氏の邸宅でしたが、大正12年(1923)9月1日に起きた関東大震災を機に、カメラ製造を営む山本栄之助氏の居宅となります。その後、増改築を繰り返しながら、現在のような伝統的な和風建築に洋の要素を見事に取り入れた近代和風建築となりました。イベントでは、「葛飾柴又の文化的景観」や山本亭の建築・庭園の魅力などについての生涯学習課文化的景観係の学芸員による解説の後、邸宅の東棟北側にある地下防空壕の見学を行いました。葛飾区内に造られた一般的な防空壕とは異なり、山本亭の防空壕は、防火扉や金庫、シャワー室も備え付けられた丈夫なコンクリート造で、二部屋に分かれています。参加された方々からは、「想像していた防空壕と全然違いました!」「山本亭の防空壕は初めて見ましたが、来て良かったです。」といったご感想をいただきました。



防空壕見学の様子

水神祭が行われます

毎年11月3日には、帝釈天題経寺と水神堂(写真)で水神祭が行われます。水神堂での読経の後、題経寺境内の御神水で読経が行われます。金町浄水場の南側、間口1間の小さな瓦葺の祠堂に祀られている水神様は、昭和11~23年に行われた金町浄水場の拡張工事の際に現在地に移されたものです。また、映画『男はつらいよ』の寅さんの産湯として知られる題経寺の御神水は、題経寺の縁起とも深い関わりを持つ霊水です。

柴又の水神祭は、「水害に遭わないように」「井戸水が枯れないように」との願いが込められた、柴又地域における古くからの水への信仰を今に伝える行事です。



寅さんサミットが開催されます!

11月3日(金)・4日(土)の2日間、「寅さんサミット2023~日本の原風景を守り、後世に伝える~」が開催され、秋田県鹿角市や佐賀県小城市等、映画『男はつらいよ』のロケ地となった17地域が柴又に集います。

各地の名物やグルメ、伝統芸能を楽しみながら、「寅さんが繋いでくれた地域や人との縁、寅さんがこよなく愛した各地の美しい風景を大切に守り、後世に伝えていくことを共に考えていけたら」そんな想いが込められたイベントです。



©寅さんサミット実行委員会

※「葛飾柴又の文化的景観」を紹介するコーナーも開設!

ご注意ください

「葛飾柴又の文化的景観」の選定範囲内では、工事を行う際には届け出等が必要となる場合があります。

- 柴又まちなみ景観ガイドライン
帝釈天境内の景観、江戸川堤、柴又公園等(高台)からの眺望、参道から帝釈天への通景に関わる内容
- 葛飾区景観地区条例等
柴又地域景観地区内で建築物や工作物の新築、新設、外観の変更等を行う場合
- 重要文化的景観に係る選定及び届出等に関する規則
「葛飾柴又の文化的景観」の重要な構成要素の工事を行う場合

詳しくは下記の間合せ先までご連絡ください。

【お問合せはコチラ】

葛飾区生涯学習課文化的景観係
〒124-8555 葛飾区立石5-13-1
TEL 03-5654-8477
FAX 03-5698-1541

「文化的景観ニュース」のバックナンバーのほか「葛飾柴又の文化的景観整備計画」や「文化的景観パンフレット」をご覧ください。

